

第二次大戦サイパン戦の海事遺産トレイル

WORLD WAR II MARITIME HERITAGE TRAIL BATTLE OF SAIPAN



川西H3K
LVT (A)-4
愛知E13A
PBMマリーナ
TBMアヴェンジャー
特設駆潜艇(推定)
日本貨物船
大発上陸用舟艇

M4 シャーマン戦車

U.S. AIRCRAFT

Foreground: 海事遺産トレイルの遺跡地図と飛行艇PBMマリーナ
Background: タナパグ環礁のグラマンTBMアヴェンジャー



グラマンTBMアヴェンジャー

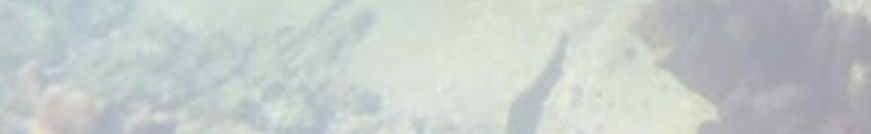
グラマンTBMはアメリカ海軍及び海兵隊のために開発された雷撃機であった。旧日本軍による真珠湾攻撃への反応としてアヴェンジャー（報復者）のニックネームが与えられた。アメリカの航空機メーカーであるグラマンとヴォートはアメリカ海軍の雷撃機受注を巡って争っていたが、グラマンのデザインが軽量かつ速度で優れていた。加えて、折りたたみ翼が、航空母艦で収容スペースをより確保できるということが海軍にとって魅力的であった。1942年に最初のTBFアヴェンジャーがグラマンの組み立てラインで量産された。一年後には、生産はジェネラルモーターズに引き継がれ、グラマンは艦上戦闘機の生産に傾注した。これが当時TBFの表記からTBMへと制式番号が変わった経緯である。戦時中、何千機ものTBM　アヴェンジャーはジェネラルモーターズによって製造された。TBMは1942年に配備され、ミッドウェー海戦が初陣ともなった。最後のTBMアヴェンジャーは1962年にアメリカ軍での役目を終了した。

アヴェンジャーは操縦士、砲塔射撃手、無線士兼爆撃・腹面射撃手の3名の乗員によって運用された。武装には前部に30口径機関銃、50口径機関銃が後部の電気駆動砲塔のすぐ横に備えつけられ、30口径手動機関銃が尾翼下の機腹部に備えられた。後期型のアヴェンジャーは前部機関銃を50口径機関銃として両翼に収めた。改良された武装は前部の火力を強め機体の操縦性を高めた。



わたしはアメリカがサイパンに爆撃を開始した日を覚えています。わたしは他の子供たちとチャラン・キヤの農場で遊んでいました。その後、突然どこからともなく、大きな音を聞きました。飛行機はわたしたちの上空を飛んで島中に爆弾を落としました。わたしの家族は地面に掘った避難壕に逃れました。

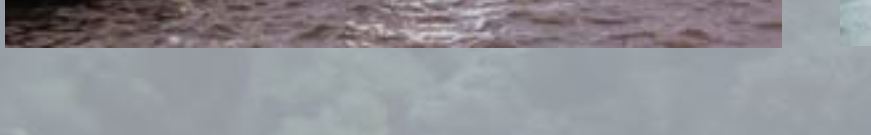
キャロリニアンのお婦、ローザ・タマン・マリティが甥の息子ケイン・カモチャ・カストロに語る。



マーティンPBMマリーナ

マーティンPBMマリーナはアメリカ軍の飛行艇であり、太平洋のほぼ全ての作戦に従事、サイパン戦においては旧日本軍の潜水艦、輸送船、航空機の攻撃に参加。マリーナは重火器を装備し偵察任務にあたったことから「戦う飛行艇」と呼ばれた。しばしば、より有名な飛行艇であるカタリナと比較されるが、PBMは戦争中にアメリカによって2番目に多く使用された航空機であった。

アメリカ海軍はカタリナを偵察爆撃機として開発したが、海岸の基地爆撃と敵戦艦の哨戒と攻撃を目的とした重火器武装の飛行艇を必要していた。結果として、双発エンジンを持つ航空機がこれらの要件を満たすとして案を募った。試作機1機を開発するよう発注を受けたマーティン社は、1939年に性能試験のための3/8模型をデザイン、製作した。いくつかの修正を経て、1941年に最初のPBM-1が供給された。長い使用期間中においては、マリーナは様々な役割を果たした。シェーンラインによれば、「PBMマーティン・マリーナはアメリカ海軍によって長距離偵察爆撃機として、哨戒のほかに兵士や物資の輸送と様々な使用された。」とされる。最も重要な任務のひとつは、操縦士の海上救助と機体の生存者の救出であった。



サイパン戦ではマリーナは探索、偵察、哨戒、救難作戦に使用された。戦闘中、タナバグ環礁の外洋で任務にあっていたマリーナは、荒波にさらされ損傷を受けた。日本軍の航空機と見まがうことから、2機がアメリカ軍によって撃墜されるなど、悲惨なこともあった。サイパンでのアメリカの勝利によって、マリーナの乗務員は日本軍の飛行艇基地を使用することができた。この基地は外洋で機を運用するのと違い、荒波から機体を保護できた。マリーナは環礁での潜水艦索敵の掃海任務をサポートし、墜落したB-29の乗務員の救助などを助けた。

参考文献

Allward, M., 1981, *An Illustrated History of Seaplanes & Flying Boats*. Moorland Publishing.

Bell, S., 2010, *I Can Ex-Plane: A Study of Site Formation of Submerged Aircraft in Saipan*. MA Thesis, Flinders University, Department of Archaeology.

Drendel, L., 2001, *Walk Around TBF/TBM Avenger*. Squadron/Signal Publications.

Hoffman, C., 1950, *Saipan: The Beginning of the End*. Washington, D.C. Historical Division, Marine Corps Monograph, Vol. 6.

Hoffman, R., 2004, *The Fighting Flying Boat: A History of the Martin PBM Mariner*. Naval Institute Press.

McKinnon, J. and T. Carrell, 2011, *Saipan WWII Invasion Beaches Underwater Heritage Trail*. Ships of Exploration and Discovery Research, Inc.

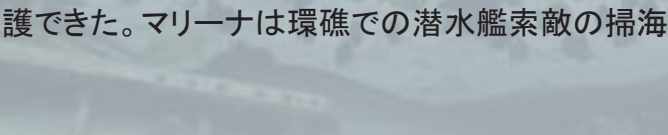
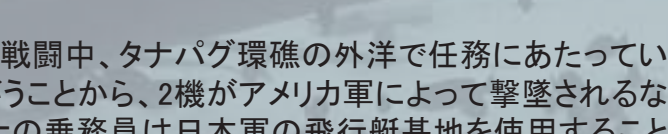
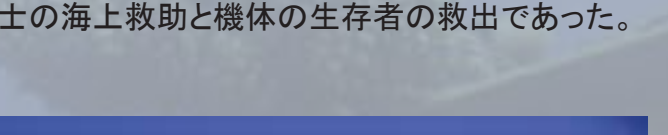
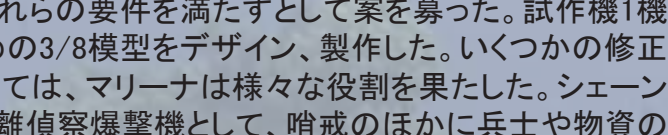
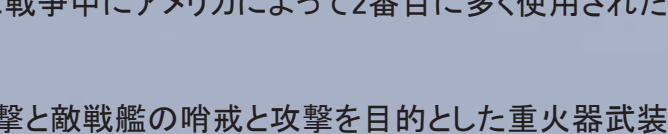
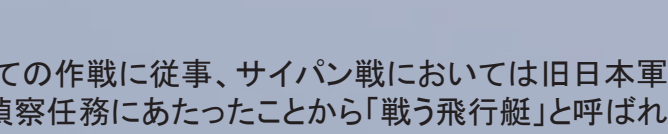
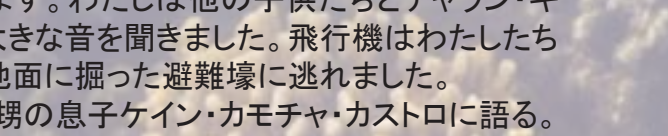
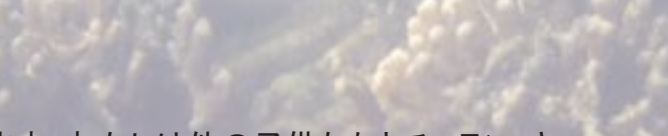
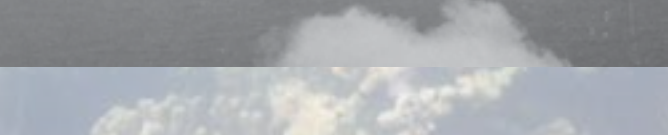
Pacific STAR Center for Young Writers, 2004, *We Drank Our Tears: Memories of the Battles for Saipan and Tinian as Told by Our Elders*. Pacific STAR Center for Young Writers, Saipan Commonwealth for the Northern Mariana Islands.

Shanline, R., 1985, The Dependable PBM Martin Mariner. *Aerospace Historian*.

This material is based upon work assisted by a grant from the Department of Interior, National Park Service. Any opinions, findings, and conclusions or recommendations expressed in this material are those of the author(s) and do not necessarily reflect the views of the Department of Interior.

残る機体を見学する

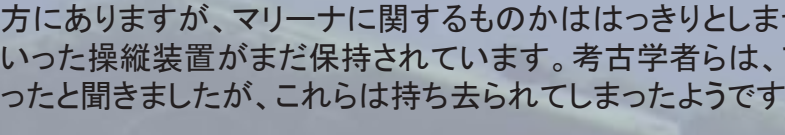
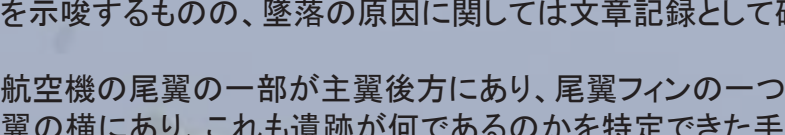
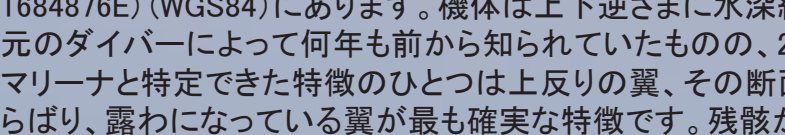
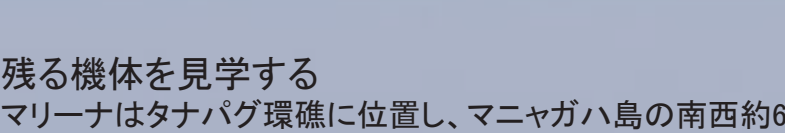
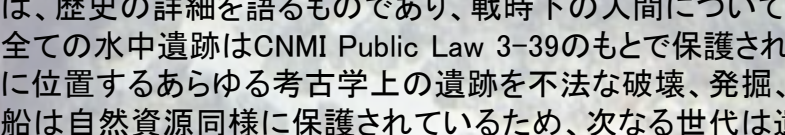
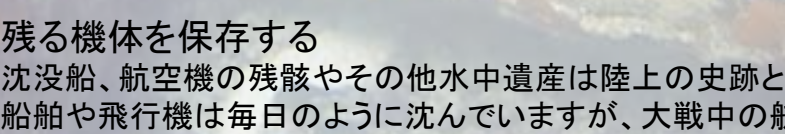
TBMアヴェンジャーの残存機体は環礁のすぐ内側、北端の船のルート、15 14' 7.82” N, 145 41' 57.82” E (55P 0360319N, 1684791E) (WGS84)に位置します。水深約2.5-3mに位置し、スキューバダイビングでもシュノーケルでも容易にアクセスが可能です。機体は上下逆さまで海底に横たわり、主に翼の構造が残っています。エンジン、プロペラ、尾翼などは全て失われていますが、着陸緩衝脚は無傷で飛び出しています。星型エンジン、胴体監視窓の一部、砲塔のリングなど、その他残骸が機体の周囲に散らばっています。潮が著しく低い時には、着陸脚の一部が水面に出るため、かつてはボートを係留するために使用されていました。残念なことに、係留に使われることは着陸脚の一部を損なうことになり、もしこれが中止されなければ、機体の破損や全壊を招いたかもしれません。どうかこの機体の保全に協力し、機体周囲での停錨は避けてください。



残る機体を見学する

TBMアヴェンジャーの残存機体は環礁のすぐ内側、北端の船のルート、15 14' 7.82” N, 145 41' 57.82” E (55P 0360319N, 1684791E) (WGS84)に位置します。水深約2.5-3mに位置し、スキューバダイビングでもシュノーケルでも容易にアクセスが可能です。機体は上下逆さまで海底に横たわり、主に翼の構造が残っています。エンジン、プロペラ、尾翼などは全て失われていますが、着陸緩衝脚は無傷で飛び出しています。星型エンジン、胴体監視窓の一部、砲塔のリングなど、その他残骸が機体の周囲に散らばっています。潮が著しく低い時には、着陸脚の一部が水面に出るため、かつてはボートを係留するために使用されていました。残念なことに、係留に使われることは着陸脚の一部を損なうことになり、もしこれが中止されなければ、機体の破損や全壊を招いたかもしれません。どうかこの機体の保全に協力し、機体周囲での停錨は避けてください。

機体は周囲の岩礁の一部となり、内部や外部はサンゴ類におおわれています。ナンヨウブダイ(Chlorurus microrhinos)やナガニザ(Acanthurus nigrofuscus)が藻をついばんでいるのを見ることができます。少数のセナスジベラ(Thalassoma hardwicke)が着陸脚の周囲で小さなエビや小魚を探しています。ルリホシスズメダイ(Plectroglyphidodon lacrymatus)が残骸の穴に生息しています。幼体に青い虹色の斑点も持つことがこの魚にその名を与えています。



残念なことに、遺跡はボートやダイバーによる見学の影響、アンカーによるダメージや遺物の持ち去りが顕著となっています。特にアンカーは翼の壊れやすいアルミニウムに深刻な被害を与えています。弾薬類やその他小さい遺物はもとの位置から動かされ、遺跡の周囲に積まれています。これらの遺跡を見学する際には、遺物の移動や持ち去りが法律違反であるというだけで無く、この航空機が人々にもたらす重要な情報も奪い去るのだということを覚えておいてください。

遺跡は様々な魚、無脊椎動物が生息する小規模な岩礁に囲まれています。翼に開いた大きな穴には、隠蔽種に隠れ家を提供しています。幼体のヨスジフエダイ(Lutjanus kasmira)を露わになった翼のしたに隠れているのをアカマツカサ属(Myripristis spp.)とウケグチイットウダイ属(Neoniphon spp.)の魚と一緒に見ることができます。アカマツカサとウケグチイットウダイの比較的大きな目は夜行性であることを示唆し、2種とも夜に翼の下から出て活動し無脊椎動物や小魚をついばみます。

